

ARCルワンダ子ども支援基金近況報告「現地NGO ルワバリンダ 訪問」

ARCがルワンダで行っているプロジェクトの一つに「ARCルワンダ子ども支援基金」があります。2002年度より開始したこのプロジェクトは、皆様からのご寄付によって、ジェノサイド孤児、エイズ孤児などの子どもたちがいる現地の児童養護施設を通じて、子どもたちが小学校に通えるように、学費、学用品、制服などをサポートしてきました。ルワンダ政府は、可能な限り孤児たちは一般家庭に引き取ってもらって育ててもらいたいとしていますが、それでも里親が見つからない子どもをサポートする施設はいまだに必要とされています。そのような子どもたちを支援している現地NGO「ルワバリンダ(RWBALINDA)」を、慶應義塾大学の学生団体「S.A.L.」の皆さんにレポートしていただきます。

はじめに

私たちは、慶應義塾大学公認国際問題啓発団体 S.A.L.という団体で活動しています。

今回、私たちはARCさんの協力のもと、スタディツアーと称して、ルワンダの歴史と魅力を取材し、現地NGOのルワバリンダという団体を視察して参りました。

ルワバリンダについて ルワバリンダとは、ルワンダで主に孤児を中心とした児童に、奨学金支援を行っている組織です。ルワバリンダは、“Mama,Rwanda”の愛称でルワンダ人に親しまれている、ピースさんという女性を取り仕切っています。

ルワバリンダは、彼女の父親が設立した団体です。設立当初、ピースさんの父親は1994年のジェノサイドから逃れた難民の一人で、ルワバリンダは彼が避難先のウガンダからルワンダに帰国してすぐに設立されました。当時、ジェノサイドの被害で親を失った子ども達が溢れ帰っていたといいます。彼は孤児となった子ども達の生活を支援するために、ルワバリンダを設立しました。



ピースさんの父親が去年亡くなり、ピースさんがその後を継いでいます。現在では、ジェノサイド当時孤児であった子ども達は成人して、ジェノサイドでの孤児はいなくなりましたが、ルワバリンダではいまでも変わらずに様々な理由で孤児となってしまった子ども達の就学支援を行っています。しかしながらその活動は苦難が多いそうです。国からの援助もほとんどなく、国外にもスポンサーはほとんどいません。活動資金はピースさん自らが、他の様々なビジネスを行って、その利益で賄っているそうです。活動は大変だそうですが、ピースさんの大きな優しさに包まれて、子ども達は元気に学校に通っています。

孤児たちの背景



ルワンダで孤児になる子どもたちは、ルワンダの虐殺の影響によるものが大きいです。ルワンダの虐殺では、ツチ族を根絶やしにする目的で、HIVに感染したフツ族の男性をツチ族の女性にレイプさせるという行為が行われました。その他にも耳を覆いたくなるような非人道的な行為が行われています(例えば1歳の赤ちゃんをレイプしたり、生まれたばかりの幼児を壁にたたきつけたりとといった行為です)。このような歴史的な背景から、ルワンダの虐殺で両親を失った孤児が多く、その数は、推定80万人が殺されたために、数十万人の子どもが両親を亡くしたとも言われています。そのため、ルワンダの虐殺後は多くの孤児院が開設されました。1979年には4つだった児童養護施設の数、2011年には34にまで増加したそうです。2016年現在では、1994年に発生したルワンダの虐殺から22年の月日が流れており、ルワンダの虐殺で両親を失い、孤児になった子どもはほとんど大人になっていると言えます。しかし、ルワンダにおける孤児の問題が解決されたとは言えません。首都キガリを一步出れば、貧困が孤児を作り出しています。親戚に引き取られたが、その親戚が精神障害を負っており、住まいを転々とするしかない状態。ルワンダではよく見られる医療ミスで両親を亡くしてしまった子ども。HIVに感染したために、親を失ってしまった子ども。ジェノサイドだけではなく、様々な問題がルワンダの子どもたちを孤児に追いやっています。

調査結果 2週間のルワンダ渡航のうち3日間、ルワバリンダ、及びルワバリンダから支援を受けている孤児の調査を行いました。目的は、効果のある支援について考えるためです。調査項目は、孤児のリストがあるか、孤児のメンタルケアをしているか、足り

ていないものは何か、ドナーが他にいるかどうか、孤児の様子など。調査結果、ルワバリンダは孤児のリストを作っており、名前、出身地、年齢、親の有無などが記録されていました。孤児のメンタルケアに関しては特別に何か行っている様子はなく、金銭面、



物資面の支援のみのようです。これは、ルワバリンダが孤児院ではないため、直接的な孤児の世話ができないからだと思われます。今後、ルワバリンダと孤児が通っている学校との連携や協力が必要だと感じました。足りていないものとして多かったのが、制服、カバン、靴、本、教科書といった学用品です。ルワバリンダは、ドイツのある団体から支援を受けているようですが、あまり満足できるものではないということでした。総括すると、子どもたちは学校に通うことは出来ています。しかしながら、それ以上の改善は今の段階では望めていません。上述のスクールマテリアルの足りなさが主な問題点ではありますが、他にも家庭環境が劣悪である子ども達もいました。今後は学校面だけではなく、その他の生活に関する事項についても、支援が必要であるかもしれません。



感想

現地で、ルワバリンダが一体何をしているか見る事ができたのは貴重な体験になりました。3つの学校を訪問したのですが、やはり、孤児と一つにまとめてもそこには生活レベルが違うことが如実に表れていました。整った施設の学校に通うことができる孤児からは笑顔があふれる一方で、これからの人生どうなるかわからないといった不安な表情をしている孤児もいました。このような孤児の細かなニーズを汲み取っていかに支援していくか、そしてそれが短期的なものに終わらせないようにしていくか、それが

大切だということを改めて実感しています。しかし、今でも忘れないのが、2つ目の訪問先(教会に周辺学校から通っている孤児たちを集めてくれました)で子どもたちが見せた表情です。彼らは僕たちを異国な人と見るよりかは、今の自分たちの状況を助けてくれる救世主かのような表情をしていました。いや、彼らがそのように思っているのだと思いこみ、彼らの視線を通して僕自身を見つめていたのかもしれない。とにかくルワンダで感じたことを忘れずに、僕なりにできることを続けていきたいと思ひます。(竹内)



現地では、ルワバリンダのピースさんと一緒にいる機会が多かった。ピースさんは、現地のルワンダ人からママと呼ばれているほど信頼が厚く、面倒見のいい方だという印象を受けました。ルワバリンダから支援を受けている子どもは、他の子どもと比べても明るく元気であった。渡航ならびに調査の結果、ルワバリンダには好印象を受けました。(棚橋)

今回、3つの学校を訪問し、たくさん子ども達にふれあいました。いろいろな子ども達が学校には通っていて、その表情は千差万別でした。やはり、ピースさんの支援を受けて、綺麗な制服と教科書を持って通っている子どもの笑顔は、人一倍明るいものがありました。反対に、未だ支援を受けることが出来ておらず、ボロボロの格好で登校する児童の顔には影があったように思ひます。あらためてこういった支援と、学校に楽しく通うことが、子ども達にとっていかに大切かを痛感させられました。ルワンダという遠いアフリカの小国のことなど、実際に行くまでは思ひもよらなかったし他人事でしたが、子ども達とそれを支援するピースさんの優しさに触れて、自分たちはこの姿をたくさんの人に知って貰いたいと思ひ、活動意欲にもなりました。こういった支援には様々な問題と批判が付いてまわるものですが、これからもARCさんとピースさんには支援を続けて欲しいと願っています。また、私たちはその発信という役割を担い、活動してまいります。(岡)

アフリカ平和再建委員会

Africa Reconciliation Committee: ARC-JAPAN

〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-6-1 四谷サンハイツ 511 号室 Tel./FAX: 03-3351-0892

E-mail: headoffice@arc-japan.org ホームページ <http://www.arc-japan.org>



ツイッター アフリカの紛争と平和に関するイベントや情報の発信をしています!

@ArcJapanNews どんどんフォローしてください!



フェイスブック 日頃のARCの様子やプロジェクトの近況、アフリカ関連のイベントや情報の発信をしています!

[ARC ページ] <https://www.facebook.com/ARCJAPAN/> “いいね”、“シェア”をお願いいたします。